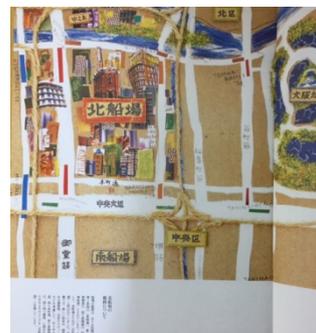


北船場と北浜

シンポジウムに出かけたとき、北浜や堺筋、船場あたりを歩いた。御堂筋はよく歩くが、船場界わいは久しぶりだ。中央図書館で『大阪 北船場スタイル』2006年10月を手にとった。写真も含め興味深いので、すこし紹介したい。

“北船場、と聞いて小首をかしげる方もいることでしょう。地図を広げれば、南船場はあるけれど、たしかに北船場という地名は存在しません。でもじつは北船場の名は太閤秀吉の時代にまで遡る、とても由緒正しいものなのです。天下の台所と呼ばれた大阪にあって、船場こそがその求心力であったことはご存知の通りです。そして、本町通を境に北側のエリアは北船場と呼ばれ、日本経済・文化の中心地として発展してきました。その後、明治～平成と時代の移り変わりとともに、北船場という言葉はあまり耳にしなくなったのです。

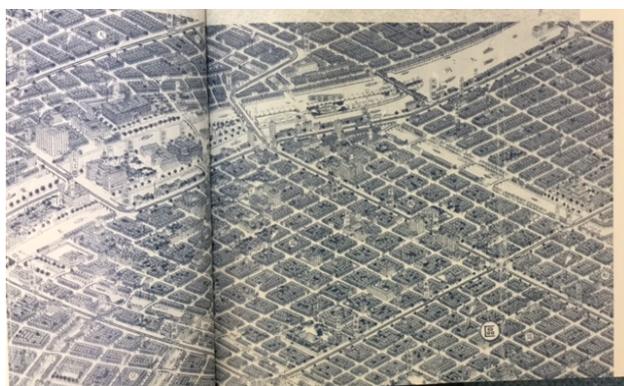


船場の範囲は、北＝土佐堀川、南＝長堀川（長堀通）、東＝東横堀川、西＝西横堀川（阪神高速）とされています。そして、本町通りより北が『北船場』と呼ばれていました。

大阪の昔を知る人は「堺筋はかつて大阪一栄えた場所」と言う。それは天下の三越がこの地を選んだことからよくわかる。人の流れが御堂筋に移ってもなお、北浜は船場の人々に愛され続けるが、三越は昨年、ついに300年以上の長い歴史に幕を下ろした。船場と共に歩み、北浜の象徴だった三越を柱に、その歴史をひも解いてみる。



写真中は大正時代の堺筋の中心街と北浜、「白亜の殿堂」と称された三越（大阪歴史博物館「大阪市産業大観」より）。写真下は大正13年発行の地図（『大阪市パノラマ地図復刻版』）。



北浜が栄え始めるのは、江戸時代のはじめの頃。大阪夏の陣で荒れ果てた船場の復興がはじまると同時に、北浜周辺に人や物資が集中するようになった。それは、東に高麗橋、北に難波橋があったことが大きな要因だったと考えられている。高麗橋は

大阪城と船場を結ぶ重要な公儀橋で、橋詰には幕府の「高札」が立てられ、人々は幕府の御触れを知るためにこの場所を訪れた。一方、難波橋は大阪最大級の橋として紀州街道（堺筋）を北上した堺からの人や物資が通ったとされる。淀屋橋と天神橋の間には備前岡山の船着場もあった。つまり、北浜周辺は「天下の台所」といわれた船場の入り口だったのだ。

そして、夏の陣より 76 年後の元禄 4（1691）年、高麗橋の通りに三越の前身である「越後屋(三井呉服店)」が大飯店として呉服・両替店を開く。当時は岩城榎屋、富山大黒堂、河内屋などの呉服店をはじめ、両替店や日用品店などさまざまな業種の店が建ち並び、ここに来れば嫁入り道具の一切が整うといわれた。なかでも越後屋は糸店やべっ甲店など支店を広げ、享保から元文にかけては奉公人が 100 人を超えるほど隆盛を極めた。明治 37（1904）年に「三越呉服店」と名を変え、百貨店への道を歩み出すこととなる。また、明治 44（1911）年には 2 階建ての洋館を建築し、ルイ王朝式の休憩室、食堂、化粧室を設けるなど、北浜文化をリードする存在でもあった。

（2018 年 2 月 11 日）